

ただ一つ欠けていること

小松茂生
神奈川県・六六・無職

あなたが、まなかいから去って、はや二十年、日を追って記憶が薄れる事もなく、むしろ当今では思いが深くなっていく気がいたします。今思えば、あの当時、まったくさやかな目標を立てて、懸命に生きていました。小さな家をもって、子供も二人は育てたいなどと。それでもそんな願いは、夢のまた夢でとても果たせる願いだとは思えなかつたのでした。

結婚して十八年目、本当に狭い一戸建ての古い家を買って、家族四人でそこに住んだときは、人生ここに極まったと感激したものです。

あなたはそこにたつた五日間いて、入院してしまつた。

あとで、同室の患者さんが、

「お家を買われたんですってね。奥様、嬉しそうに話してらしたのに」

と、涙ながらに様子を伝えてくれました。

それからの何年かは夢中でした。

残された二人の子供も、大きくなって、君の宝物だつたあの家も、三人でも狭くなつてしまつた。そこで成人した子供達と力を合わせて、今度、新居をつくりました。私達が抱いた望みは小さなものだったから、今はこれで十分足りている。よくやつたと褒めてください。

ただ一つ、欠けているのはこの場に君のいないこと、昔を知っている友人に会うときつとこう言つよ。

「彼女がいたら、どんなによろこぶだろう！」

ほんとにそうだ。きつと君がいれば、目を輝かせて、台所を動きまわり、床を磨き、家具をレイアウトすることに、明け暮れていると思う。君は活動的な女だつた。

それが目に見えるように分るから、君ならどうする、と話しかけながらやっています。時は逆に戻らないのだから、無駄な感傷はやめて、ここに君がいる、と思ひ続けることにしています。そばにいて、これからも多くの生きる知恵を授けて下さい。

*妻が病で世を去って二十年、今、念願の新居ができあがり、それにつけても、ともにやってきた事を実感するので、一度言葉にあらわして話しかけてみたかった。